

# 資格とっ太郎の 行政書士 & 宅建

## 合格秘話



(※2019年追記)

このレポートは、僕(資格とっ太郎)が行政書士と宅建をW取得するに至った、きっかけから始まり、実際に合格するまでの軌跡を綴った物語です。

合格という目標を達成してテンションも上がった時期であり、

「合格体験記でも書いたら誰かの役には立つだろう。」

というノリが、若干悪い方向へ働いて出来上がってしまった、やや壮大なストーリーになっています。

なんと、合格体験記なのに50ページ以上もの文章量で長々と、大事なことからどうでもいいことまで、ふんだんに書き綴られています。

「これから自分が行政書士試験を目指すための参考にしよう」

と思って、開いていただいているのなら、ほんとに申し訳ないんですけど、“全くそういう類のものではない”とだけ断っておきます。

何かの役に、というより、資格とっ太郎という人物をより深く探っていこう、という極めて奇抜な人だけが楽しむことができるもの。

ぶっちゃけもう、ほとんどただの日記です。

その点をあらかじめご了承の上、ちょっとした読み物としてお楽しみいただければと思います。

では、次のページより本編が始まります。

## <<2013年 4月>>

### ◆きっかけ◆

友達から一通のメールが送られてきた。

「行政書士の資格とることにした！で、今の会社辞めたい。」

高校時代からの友達だった。

卒業して就職してからも頻繁に遊んでいた、僕にとっては一番の友達だろう。

僕が地元の福岡から横浜へ転勤になってからは会う機会は減ったが、よく連絡はとっていた。

そしてその友達が、会社での仕事がつライ状態にあることは前々から知っていた。

最近、彼は元気が無かった。

決して明るい話題ではないメールがよく来ていた。

おもわず出てしまったであろう愚痴。仕事でのつライ出来事。家族とのケンカ。

高校時代のようにバカやってた時が懐かしく思えてくる。

理由もなくテンションがあがり、当てもなく原付を乗り回し、つライ事と言えばたまにケンカをしたときか、バイトで怒られたときくらいのものだっただろう。

歳を取るとなぜこんなにも愚痴がこぼれてくるのだろう。

僕も例外ではない。

仕事が終わって家に帰ると、気がつけば嫁に仕事の愚痴ばかり話している。

それが原因で嫁とケンカになることも少なくない。

悪い癖だと分かっている。でもなぜ悪いと知りながら繰り返してしまうのだろうか？これが大人なのだろうか？

僕も、その友達も、この時まだ 24 歳である。

決して年相応の「若さ」はなかった。

話を元に戻そう。

そんな友達から突然送られてきたメールは、前向きなものだった。

詳しい事の成り行きはよくわからなかったが、新たに行政書士の試験に挑戦しようという彼を、僕は心の底から応援したいと思った。

「マジで！？頑張って！」

少しばかり若さを取り戻した気がした。

しかし問題はここからだった。「応援」したいなどという僕の気持ちは完全に甘かった。

友達からもう一通メールが送られてきた。

「行政書士、一緒に受けよう！」

全く予想していなかったわけではない。

彼は何か新しいことを始めようとするとき、よく僕に誘いをかけてくるのだ。

事実上のミチヅレである。

普通に考えれば、そんな誘いは丁重にお断りしていただろうが、

しかし今は少しだけ状況が違う。

ながらく憂鬱な状態だった彼がやっと取り戻したであろう「やる気」。

僕の回答次第で、せつかく火がついたやる気に、水をかけてしまうことにもなりかねない。

「友達に誘いを断られたくらいで消えてしまうようなものなら、最初からたいしたやる気では無い」から、断ってもいいだろうとは思った。

しかし、一緒に挑戦することで、お互いに助け合い、刺激しあえたなら、孤独で頑張るよりも遥かに合格できる可能性は高くなるだろうとも思った。

僕はそれも「応援」の形だと思ったし、心の底から応援したいという気持ちは本物だ。

自らの身も削らない口先だけの応援なんて、本当の意味での応援ではない。

それに、僕にとっても決して悪い話ではなかった。

行政書士に興味を持った時期もあるし、受験しようと思ったことが無いわけではない。事あるごとに理由をつけてタイミングを逃してきたのだ。

図らずも行政書士の試験日は11月。

試験まで7カ月というちょうどいい時期でもある。

挑戦するタイミングがあるとしたら今しかない！

一緒に挑戦できる仲間ができたなら、これほど心強いものはない。

「いいよ！俺も行政書士とりたかったから。」

これが、僕が行政書士を受験することとなった直接のきっかけである。

### ◆道連れから生け贄へ◆

そして、友達に了解メールを送った次の日。僕は本屋へ足を運び行政書士のテキスト・問題集を全て買いそろえた。

勉強を始めるなら早いほうがいい。  
早ければ早いほうがいい、そうに決まっている。

成功哲学の本にも書いていた。「さあ！今すぐ始めよう！」と。

それから一週間もしないうちに友達からメールが来た。

「やっぱ行政書士やめた！司法書士にする！」

！？！？！？

意味がわからなかった。

「なんで！？」

「だって司法書士のほうが役に立つでしょ！」

僕は彼が極度の気まぐれであることをすっかり忘れていた。

まだテキストを買う前ならよかった。「あっそうなの」と僕もその後どうするか考える余地が残されていた。

しかし、すでにテキスト・問題集を全て買っていた。勉強も始めていたのだ。

嫁にお小遣いをねだって買ったテキスト。

いや正確には、僕はお小遣い制ではないのだが、自由に使えるお金はかなり限られているし、無駄遣いをすると逆鱗に触れる程度にはチェックされている。

「受けるのやめた。」なんて言ったら、嫁からのじわじわ痛ぶってくる強力な精神攻撃は避けられない。←これマジ。

考える余地は残されていなかった。

「道連れ」なんていう言葉すらも甘かった。  
これはもうただの「生け贄」である。

そんな僕の気持ちなんてつゆ知らず、友達から送られてきたメール。

「お前も行政書士じゃなくて司法書士受けようや！」

さすがにこれは断った。「もう行政書士のテキスト買ったから遅い」と。

「どっちも受ければいい！」という彼の鬼メールを、さりげなくスルーして僕は行政書士の勉強に取り掛かる。

なぜ僕の周りにはドSばかりなのだろう、と嘆きながら。。

## <<2013年 5月>>

### ◆壁◆

勉強を始めて二～三週間くらい経った頃だろうか。

ここで初めて壁にぶつかった。  
民法の科目にさしかかったところである。

「理解できない。。。」

行政書士の勉強を開始して初めて感じた感覚だった。

「何回読んでも全くわからない。。。」

もう打つ手なしという感覚。

どんなに読み返しても、どんなにゆっくり読んでも、どんなに細かいところまで入念に読みこんでも理解できない。

まさにお手上げ状態。

しかし、同じ所でいつまでも立ち止まっても仕方ない、と、取りあえず理解できないまでも読み進めることにしたのだ。

この頃から勉強するのに大きなストレスを感じ始めた。

とりあえず読み続けていたら何とかなるだろうと、根拠はないが理解できないものを読み続ける。

どんなに眠くなっても、どんなに頭が痛くなっても、とにかく読み進めた。

ことは何も解決しなかった。ストレスがたまっていく一方だった。



## ◆出産◆

少し話が逸れることになるが、この時期の記録を書くにはどうしても外せないポイントなので、一応ここに書き記しておく。

番外編として読んでいただければと思うが、興味がなければスルーしてもらっても構わない。

5月のド真ん中。僕に初めての子どもが産まれた。

しかも二人。

そう、双子の出産である。

もともと双子がリスクの高い出産であることは医者から伝えられていたので、行政書士の勉強に取り掛かる中でも、非常に心配していたことだった。

4月の終わりごろから、嫁は切迫早産（早産が差し迫った状態）のため大学病院に入院することになり、僕はその日から見舞いに足しげく通うことになった。

入院するのが嫌だ、と駄々をこねる嫁を説得するのが大変だったことは記憶に新しい。

この時、たまたま目に入った嫁のスマホ画面に、「旦那から離れたいです。どうすれば離婚できますか？」というタイトルの検索結果ページが表示されていて、非常にドキッとしたが、

「あっ、違うよ。そうじゃないよ。」と、頼んでもないのに画面を僕の目の前に掲げ、よく確認して見てみると、検索したワードは

『切迫早産 入院 旦那と離れたくない』

というなんともほっこりするワードであったことは記憶に新しい。

検索結果は真逆のページを表示していたようだ。

Google のアルゴリズムもまだまだである。

そして、入院から 3 週間が経過したときの事。

日も完全に沈んだ時間、職場で帰り支度をしている僕に、突然嫁からメールが送られてきた。

「明日帝王切開だから朝 8 時に病院来て！」

突然の事だった。

やっと子どもに会える、という嬉しい気持ちがこみ上げてくると同時に、

予定にはなかったことだったので、何か問題が起こったのだろうか、という不安な気持ちも押し寄せた。

とにかく会社の関係者には事情を伝え、次の日は休みをもらい病院へ行くことにした。

次の日。

病院へ到着し、産婦人科病棟のフロアの自動ドアを開いた先に、生まれたばかりであろう子どもが透明のケースの中で二人寝ていた。

それが自分の子どもだった。

時間通りに行ったのに、なぜかもう手術が終わっていた理由は話せば長くなるが、何はともあれ無事に産まれてきたようだ。

ちょうど妊娠 35 週の日。いわゆる早産である。

二人の体重はどちらもおよそ 2000 g。  
信じられないほど小さかった。

しかし、その小さな小さな体には生命力があふれ、力強く呼吸をしていた。

検査の結果、体が小さいこと以外に何も異常はなかった。

長い間心配だった気持ちが、ようやくホッとした瞬間だった。

#### ◆勉強時間、激減◆

子育てが大変だとは先輩たちから聞いていた。

「一人でも大変なのに二人なんて考えられない。。。」

誰もが僕をそのように脅してきた。

しかし、それが脅しではなく単なる事実にすぎなかったことに気付いたのは、  
出産から一週間後、嫁と子どもが退院した直後だった。

二時間おきのミルク。おむつ替え。沐浴。理由のわからない泣き。

何もかもが初めての経験である。

しかもこれが、昼夜関係なく 24 時間続く。しかも二人分。

タイミングが悪ければ、数十分おきに交互に世話をしなければならなくなることもある。

当然、とても嫁一人で見られるものではないので、僕も仕事をしながら可能な限り手伝えることになった。

月曜日と火曜日は（仕事休みの）嫁のお母さんにも育児を手伝ってもらい、木

曜と金曜は僕が会社に無理を言って休み、育児を担った。

この時の僕の勉強時間は、通勤電車の中と仕事の休み時間だけである。

平日に一日およそ 90 分。それが僕の勉強時間だった。

しかし育児が始まってから、会社には週に 3 日ほどしか出勤しなくなったため、一週間の勉強時間は 90 分×3、およそ 4 時間 30 分になった。

行政書士の受験者の中でも、ひどく短い時間だっただろうと思う。

しかし、育児中は勉強している時間など、文字通り「皆無」だった。

勉強できるのは、子どもと離れた通勤中と仕事の休み時間しか捻出できなかったのだ。

ただ、双子が生まれることは行政書士を受験しようと思ったその日には既に分かっていたこと。泣きごとなど言っていない。

かくして僕は、育児疲れが溜まり、勉強時間が激減する中でも必死に勉強を続けることになるのだった。。。

### ◆宅建との出会い◆

少し時間が遡り、5 月が始まった頃のこと。

まだ行政書士の勉強が順調に進んでいた時の話した。

この先壁にぶつかることなんて想像もしていなかった僕は、少々欲が見え始めた。

行政書士の勉強になにか物足りなさを感じ、もっと自分の限界へ挑戦したいという欲望に駆られた。

この頃勉強していた行政書士の科目は憲法。

物足りなさを感じるのも無理はなかった。

なぜなら憲法自体、高校や中学の社会の授業で勉強したことがあるもの。行政書士の勉強内容の中では、結果的に僕にとっては最も勉強しやすい科目だったからだ。

この先「民法」という壁が立ちはだかることを予想だにできなかった僕は、もう一つの資格を受験することに決めた。

それが宅建である。

宅建を選んだ理由は2つ。

勉強科目の一部が行政書士の科目と被っていたことと、試験日が行政書士試験の三週間前だったことである。

短期集中型の僕が一気にやり切るのにちょうどいいタイミング、そして自分の限界へ挑戦するにもちょうどいいものだった。

そう考え、僕はすぐさまテキストと問題集を揃えた。

勉強を始めるなら早いほうがいい。  
早ければ早いほうがいい、そうに決まっている。

成功哲学の本にも書いていた。「さあ！今すぐ始めよう！」と。

僕が民法の壁にぶつかり徐々にやる気を失っていったのは、その数日後である。

僕はいったい何度、成功哲学に騙されれば気が済むのだろうか。

結局、僕が宅建のテキストを開くことになるのは、まだまだ先の事でした。。

### ◆出会い◆

僕が行政書士の勉強で壁にぶつかっていた、まさにその時のこと。

僕の職場の近くには大きな本屋がある。  
仕事帰りにたまに立ち寄る本屋。

5月も終わりそうな頃だっただろうか。  
その本屋で心ときめく出会いがあった。

少し早く仕事が終わりに、この日何気なく本屋へ立ち寄った。

僕はなにか壁にぶつかったとき、とりあえず本屋へ足を運ぶことがよくある。

もしかしたら問題を解決するヒントが本屋にある大量の本という情報の中にあるんじゃないかと、期待しているからだ。

本屋は、文字通り情報の宝庫である。

そしてこの時も、僕の目の前に立ちはだかっている壁を超えることができそうなヒントが見つかったのだ。

『民法がわかった』

目的もなくぶらぶらと本屋を散策し、法律書のコーナーでこのタイトルの本が僕の目にとまった。

とても魅力的なタイトルだった。  
それもそのはず、文字通り「民法」で壁にぶつかっていたのだから。

その本を手に取り開いてみた。

僕の頭の中で革命が起こった。過大表現ではない。  
世界が変わったかと思うくらいの衝撃的な出来事だったのだ。

「わかる。。。」

その本は、まさしく『民法がわかった』というタイトルにふさわしい内容のも  
のだった。

視界が晴れわたった。頭の中のモヤモヤした感覚が嘘のようだった。

時間を忘れるほどその本を読んでしまった。しかしストレスは一切なかった。

「楽しい」

勉強する喜びを取り戻した気分だった。

そして気がつけば、とっくに日が沈んでいる時間。

「なるべく早く帰ってきてね」と、育児中の嫁に常々言い続けられていること  
を無視する結果になってしまった僕にはバチが当たった。

その日の夜、嫁の鋭い棘をもった言葉が僕のガラスのハートに突き刺さること  
になる。

嬉しいことがあれば、それ以上に辛いこともあることを再確認した日になった。

## <<2013年 6月>>

### ◆テキスト買い直し◆

僕の頭の中で革命が起こったあの日から、僕はすぐにテキストを買い直した。

民法だけでなく、他の科目も、わかりやすく書かれている本があるはずだと考えて、本屋で立ち読みし、購入した。

わからないテキストで勉強する意味はないからだ。  
なにより勉強することにストレスを感じることに耐えられなかった。

少しばかり出費がかさむことになったが、致し方ない。

理解できないテキストで無駄な時間を過ごすより、数千円の出費をしたほうがはるかに建設的である。

今は何より、時間のほうが大事なのだから。

まあ、すでに買ったテキストを無駄にするようなことになってしまった結果、嫁からの攻撃は避けられなかったわけだが。。。

テキストを買い直し、勉強することの楽しさを取り戻した僕は、それ以降の勉強は信じられないくらいはかどった。

正直、すでにお伝えしたように勉強できる時間は少なかったが、その中でも確実に読み進め、6月の中頃には憲法・民法・会社法・基礎法学・一般知識、と一通りの勉強が終わるまでに至った。

そして、初めて過去問に取り掛かったのが6月の終わりの事である。



◆実力だめし◆

初めて取り組んだ過去問は平成 19 年の問題である。

一通り全ての科目を勉強し終えた後の、実力試しのつもりだった。

しかし、思いもよらない感情がこみ上げてきた。

「ツライ。。。」

僕が普段勉強していたのは、通勤電車の中、会社の休み時間、といわゆる「スキマ時間」だった。

一気にまとまった時間で勉強することがなかった僕は、この時はじめて長い時間集中することに辛さを覚えた。

行政書士の試験時間は 3 時間である。

子どもが寝た後の時間を見計らって、なんとか捻出できた 3 時間だったが、まったく集中できなかった。

全 60 問のなか、最初の 8 問を解いた段階で限界を感じた。

「頭が爆発する。。。」

結局、この日に全ての問題を解くことはできず、全 60 問を解き終えるのに 5 日はかかった。

5 日はかかったが、なにはともあれ一通り問題を解き終えることができた僕は、採点に取り掛かった。

結果は、、、

入念に勉強したにも関わらず、得点できたのは半分。

しかも、難所の記述式問題を希望的観測から甘めに採点していたので、実質は4割も取れていなかっただろう。

行政書士試験に合格するには6割の得点が必要である。

この時「やっぱり一筋縄ではいかないなあ」という思いがこみ上げてくると同時に、「長い時間集中することができない」という課題が見つかった。

#### ◆再びテキストへ◆

一通り過去問を解き終わると、自分に何が足りないのか、弱点が見えてくる。

そしてこの時、その弱点だったのが行政法だった。

行政書士、という名前からも想像できるように、行政法は最も重要な科目である。

その最重要科目で2割ほどしか点数が取れていなかったのは、正直絶望的である。

僕はすぐさま、行政法のテキストを一から読み直すことにした。

## <<2013年 7月>>

### ◆頭の中にあいつがよぎる◆

行政書士の勉強を開始してから、初めてのことだったかもしれない。

頭の中にあいつがよぎり始めた。

資格試験に挑戦しようとする者の天敵だ。

そう「あきらめ」である。

あいつがよぎり始めた理由は二つある。

育児疲れと仕事の変化だ。

あまり大きな声で言うと嫁に怒られてしまうが、子どもが産まれて2カ月が経過しようとしていた頃、僕の育児疲れはピークに達していた。

それにもまして、仕事の変化が僕を襲った。

この時期、僕の担当していた仕事のプロジェクトのリーダーが変わった。

つまり、上司が変わったのだ。

今まで以上に容赦なくこき使われるようになった。

イヤミを言われながらも、定時退社と木金休みは、育児のため意地でも貫き通した。

「みんな仕事のために夜遅くまで残業してるのに、よく一人で帰れるなあ。」

という憎たらしいセリフは今でも頭の中に鮮明に残っている。

この文章を書いている今も、この時のことを思い出すと怒りがこみ上げてくる。

申し訳ないが、少しだけ、ほんの少しだけ愚痴を書かせていただきたい。

### ◆愚痴◆

この上司が言う「みんな夜遅くまで残業してるのに」という「みんな」。

「みんな」がそんなに偉いのだろうか？

「みんな」がやるから自分もやるのだろうか？

この人に「自分の意思」はないのだろうか？

自分の意思で「みんな」に合わせているのならわかる。

しかし、飲み会などの席で、「残業減らしてもっと早く帰りたい」と愚痴をこぼすのはなぜだろうか？

この上司だけではない、僕の職場のほぼすべての人が同じ愚痴をこぼす。

「残業が多すぎる。。。」と。

ではなぜ早く帰らないのだろうか？

早く帰りたいなら帰ればいいのか？

しかし、誰一人として「早く帰りたい」と言いつつ早く帰る人はいない。

仕事が終わらないから？ 違う。「みんな」が帰らないからだ。

自分の欲求を押し殺してでも、「みんな」という存在に自分を合わせる。

きつとこれが正しい大人の姿だと思っているのだろう。

学校教育の賜物である。

「みんな」はいつも正しい。

「みんな」の行動に合わせていれば間違いない。

「みんな」がヒドイ事をしていて自分がそれに加担したとしても、自分はなに  
も悪くない。だって「みんな」と同じことをしただけだから。

それは「みんな」の責任。決して自分のせいじゃない。

バカらしくて吐き気がしてくる。

しかしこれが、多くの会社の、いや日本社会全体の実態なのだ。

「みんな」と同調すれば、自分の責任が問われることはない。

責任の所在をあやふやにし、「みんなの責任」という名目のもと、誰もが責任か  
ら逃れようとする。

なんて楽な生き方だろう。

しかしそんな生き方で本当に「自分の人生を」生きていることになるのだろう  
か？

僕にはそれが疑問でならない。

「みんな」と同調し、自分の責任から逃れる代わりに自らの意思をもなくした、  
ただの操り人形ではないか。

忠実な会社員として仕事を始め、忠実な会社員として仕事を終える。

これは「みんな」が敷いているルールである。

そのルールに乗っていれば誰にも文句は言われなし、なんら責任を負う必要はない。

不運にも会社をクビになったら、ハローワークへ行けばいい。新しい仕事を用意してくれるから。

仕事が無いと文句を言えば「失業手当」という名目のもとお金ももらえる。

それでも仕事が無くて生活が困窮すれば、「生活保護」という名目のもとまたしてもお金がもらえる。

日本国憲法では「健康で文化的な最低限度の生活」を送る権利が国民全員に与えられている。

なんて素晴らしい国なのだろう。

こんな素晴らしい国に住んでいられるのだから、それだけでいい。操り人形でも何も問題ない。

人としての尊厳を失っても構わない。一生の生活を保障してもらえらるなら。

ホントにそれでいいのだろうか？

「自分」という尊厳ある個人という存在を捨てても、守られるべき自由を失ってでも、それでもなお生活を保障してもらいたいものだろうか？

人間とは不思議なものである。

日本を含む、世界の先進諸国は「自由」を手に入れるため、独裁国家から資本主義と民主主義を手に入れることができた。

自由は手に入った。

なのになぜ、レールに乗りたがるのだろうか？

結局自由を捨てて、それと引き換えに生活を保障してもらいたがる。

常識という名のもと、親は子どもをそのように躾けるし、学校もそうだ。

純粋な子どもたちは何も疑わず、そして教育者たちはそれが常識なのだと、なんら悪気なく子どもたちを教育する。

それが正しい答えだと。それが当たり前なんだと。

僕もその子どもの一人だった。

違和感を感じ始めたのはここ数年の事である。

僕はその時、新たに覚悟を得た。

古いものを捨てる“覚悟”。

古いもの、それは会社にしがみつこうとする想いだ。

上司からの評価を気にし、少しでも多いお給料をもらって、そして昇進しようとする、その想い。

僕はそれを捨てた。

だから上司のイヤミも我慢するし「みんな」とは違うこともする。

大きなストレスだった。

しかし建設的なストレスでもある。全ては家族のため、そして僕の夢を叶えるためなのだから。

結果的にクビになっても仕方ない。

それは「僕の」責任だ。

誰のせいでもない、もちろんみんなのせいでもないし、家族のせいでもない、「僕の」責任だ。

そう思った時、なぜか僕は少しだけ自由になれた気がした。

自分の人生を自分で生きているという感覚を、少しだけ、ほんの少しだけ感じることができた。

他の誰のものでもない、僕だけの人生だ。

この時が、産まれて初めてだったかもしれない。自分の人生を生きているという実感を覚えたのは。。



## <<2013年 8月>>

### ◆「あきらめ」から「努力」へ◆

8月は葛藤の時期となった。

7月、育児疲れと仕事疲れであきらめかけた僕の気持を持ち返したのは、夢に対する想い、それだけだった。

愚痴をこぼすだけで、何の努力もしない大人には絶対になりたくなかった。

誰に嫌われてもいい。誰に迷惑をかけてもいい。

そのころの僕は、なんて自分勝手な人間だったかわわからない。でも所詮は人間である。完璧なはずはないのだ。

決して曲げることができない信念と、何か一つ守るものがあればそれでいい。

全てを手に入れることなんて一生かけてもできやしない。所詮僕らは人間なのだから。

だから僕は勉強をした。夢を実現するために。家族を守るために。

その信念だけは曲げたくなかった。

どんなに会社に嫌われようと、どんなにイヤミを言われようと、どんなに白い目で見られようと、誰にも譲ることはできなかった。

それが僕を「あきらめ」から救ってくれた。

遙か先にある「夢」が僕を「努力」へと導いてくれたのだ。

今思えば、この時期が僕の分岐点だったのかもしれない。

物事が全て順当に上手くいくことは少ない。

順調に進み始めたとしても、どこかで歯車が狂い始める。

しかし、重要なのは、その歯車が狂い始めた、まさにその時である。

その時に僕らに残された選択肢。「あきらめる」か「乗り越える」か。

あきらめるのは簡単だ。何もしなければいい。そうすれば何もかもが元通りだ。

夢を叶えたかった。でも難しかった。だからあきらめた。ただそれだけのこと。今までと何も変わらない。

夢を叶えると息巻いたけど、自分には無理だった。夢をかなえられるのはたった一握りの人間だけなのだから。

今までと同じような人生が、もしかしたら一生続くかもしれないけど大丈夫、きっと耐えられる。だって今までもそうしてきたのだから。

夢なんて追いかけるべきじゃない。もっと現実を見なければ。僕はただの凡人なんだから。

自分を説得するセリフなんていくらでも思いつく。いや、自分で思いついたセリフですらない。

その昔どこかで聞いた、レールの上で誰かが言っていたセリフだ。

あきらめるのは本当に簡単だ。何も考えなければいい。

何も考えず、またレールに乗っかれば、あとは「みんな」が考えてくれる。

もう考えるのをやめよう。。。

ああ、なんて醜いんだ。

その時、僕の心の中にこの言葉が自然と湧き上がってきたのは大きかった。

そんな存在になり下がるくらいなら死んだほうがまだ。

いや、自分の人生を生きていないのだから死んでいるも同然だ。

僕は頭のなかに「あきらめ」という感情がよぎったとき、いつも心にこう呼び掛ける。

「目を覚ませ」と。

普通の大人たちが使う「目を覚ませ」とは正反対の意味だろう。

「夢から目を覚ます」のではなく「現実から目を覚ます」のだ。

生きている実感を得られない「現実から」目を覚ますのだ。

言うのは簡単だ。

しかし実際にそうするのは難しい。

8月は僕の中で葛藤の時期だった。

そしてある一つの事を決意した。

育児休職を取ることを決めた。

正直、身体的にも精神的にも疲れが限界だった。

僕の職場では男性が育児休職を取得した前例はない。

「みんな」は誰も育児休職なんて取らない。

もしかしたら会社での評価が下がるかもしれない。もしかしたら一生昇進からは遠ざかるかもしれない。もしかしたらどこか最果ての地へ飛ばされるかもしれない。もしかしたら会社で悪口を言われるかもしれない。

心のどこかでそう思っていた今までの僕は、どんなに大変でも育児休職を取ろうなんてことは思わなかった。

しかし今は違う。

評価？昇進？そんなことはどうでもいい！

僕は家族と自分の夢を守るためなら何だってやる。新しいものを手に入れるために古いものは捨てる。

すぐさま、上司と話し会った。

正直上司は残念そうな顔をしていた。こき使える人間が減るからだろう。

しかし、育児休職の申し出を会社側が断ることは法律で許されない。

上司はしぶしぶ10月から育児休職を取ることを合意した。

「まあ、権利だからしょうがないね。。。」

最後までイヤミだったらしい上司だ。

## <<2013年 9月>>

### ◆宅建スタート◆

葛藤と戦った8月はあっという間に過ぎ去り、気がつけば9月。

行政書士の試験まで2カ月ちょっとしかない。と同時に、宅建の試験までは2カ月も残されていない。

この時点で僕は宅建の勉強を全くしていなかった。

1カ月と3週間。宅建に残された時間はたったのそれだけ。

文字通り、僕は追い詰められていた。

考えている暇はない。

9月が始まって間もない時、早速宅建の勉強をスタートした。

行政書士よりも遥かに簡単だった。

少なくとも、全く理解できないという、あの感覚はなかった。

そして鬼門である民法も、すでに行政書士の勉強で対処できていたことも大きかった。

9月の始まりから終わりまで、ちょうど1カ月。

その1カ月で、テキストも一通り読み終えた。

宅建のテキストの最後のページを閉じると同時に、僕の会社生活もしばらくの間、終わりを迎えることとなったのである。

## <<2013年 10月>>

### ◆育児休職スタート◆

生まれ変わった気分だった。会社にも学校にも縛られない。

愛する家族と自分のためだけに過ごせる時間。

育児休職がスタートした。

育児の大変さは相変わらずだったが、今まで通り週の始めは嫁のお母さんが育児を手伝ってくれた。

僕のやりたいことは家族には伝えていて、ある程度理解も得られていたから助かった。

お母さんが育児を手伝ってくれている間は、自由に時間を使うことができた。本当にありがたい限りである。

このままのペースでいけば3週間もあれば、合格まで届くはず。そう確信できた。

しかし、僕はこのときすっかり忘れていた。あのイベントがあることを。。

### ◆実家への帰省◆

10月10日から丸々1週間、僕と嫁と子ども二人で僕の実家へ帰省することになっていた。

産まれた子どもを僕の実家へお披露目するために。

そんな大事なことをすっかり忘れていた。

いや、正確には忘れていたわけではない。

僕も久々に実家へ帰れるのを楽しみにしていたし、待ち遠しかった。

忘れるはずがない。

しかし、それが「勉強に影響を与えてしまう」という、その計算が完全に抜け落ちていた。

実質、僕が勉強できる時間は3週間ではなく、2週間だった。

帰省中も勉強しなければ間に合わない。

僕はとりあえず過去問だけは一緒に実家へ持って帰ることにした。

帰省した1週間はあっという間に過ぎた。

久しぶりに両親の喜ぶ顔が見られたし、高校時代の友達にも会えた。

例のあの友達にも会った。

「司法書士はあきらめた」と、あいかわらず気まぐれな奴だが、今度東京へ来て何かのオーディションを受けるみたいだ。

取りあえず前向きに何かに取り組んでいただけで僕はそれで満足だった。

楽しかった。心が満たされた。

問題だったのは、帰省中、僕が宅建の過去問を3問しか解けなかったことだ。

3年分ではない。たったの3問だ。

予想はしていたことだが、やっぱり時間を作れなかった。

挙句の果てに、帰るその日に台風が直撃して飛行機が1日遅れたことも手伝い、僕はどんどん追い込まれていった。

ようやく家に帰り着いた時には、残された時間は3日しかなかった。

### ◆残り3日◆

帰って早速過去問に取り掛かった。

相変わらず問題を解くのは辛かったが、そんな事を考える暇も残されていなかった。

頭が爆発しても構わない。とにかく問題を解いた。

こう見えても、夏休みの宿題は最終日まで溜めておくタイプだったが、不完全に終わったことは一度もない。

直前の追い込みには自信がある！

その自信もむなしく、この時の点数は28点だった。

宅建試験は全50問で1問1点換算だ。

合格点は毎年変動するがおおよそ35点前後である。

試験まで残り3日。この時点で28点しかとれていないのは絶望的だった。

本番では練習の8割、よくても9割くらいの実力しか出せないのが、僕の中の相場であった。

だから少なくとも、練習（過去問）では40点以上の点数をとる実力をつけなければ、合格にはたどり着けない。



しかし、現状は 28 点。

合格には程遠いうえに、時間も短すぎる。

いくら直前の追い込みに自信がある僕でも、今回ばかりは正直無理かもしれないと思った。

「僕にとっての本番は行政書士」「宅建なんて練習だ」

そんな言葉が僕の頭に囁かれてきた。

もう受験すること自体やめようかとも思った。

受験しなければ合格することもないが、落ちることもない。

何かにつけて受験できなかったことにすれば、家族も納得するだろうか。

「最低だ。。。」

そんなことが頭に浮かんでくる自分に嫌気がさした。

試験直前は嫁も気を遣ってくれて、実家で子育てをし、僕には一人で集中できる環境を用意してくれていた。

もう当たって砕けよう！

僕はこの時から、“いい意味で”何も考えなくなった。

何も考えず、ただひたすら勉強だけに集中した。

集中すればするほど、あっという間に時間は過ぎてゆく。

気がつけば試験前夜。

嫁は子ども二人を連れて実家で寝泊まりしてくれた。

僕がちゃんと睡眠をとれるように。試験に集中できるように。

### ◆試験当日◆

よく眠れた。頭がすっきりしている。

良い緊張感だ。

僕のコンディションは最高だった。

しかしそれとは裏腹に、この日の天候は最悪だった。

超ドシャ振りの大雨。

「勘弁してくれよ。。。」

今の時間は午前 8 : 00。

僕の家から試験会場までは徒歩およそ 30 分。試験開始は 13 : 00。

まだ少し時間があつたので、ギリギリまでテキストを開いて勉強した。

午前 11 : 30。

買っておいた栄養ドリンクを一気に飲み干し、試験会場へ向かうため少し早めに家を出た。ズボンとクツに、入念に防水スプレーを振りかけてから。

相変わらずドシャ振りだった。話し声すらもかき消してしまうような大雨。

傘一本ではとても対応できない雨だったが、仕方なく 30 分かけて試験会場の大学まで歩いた。

試験会場についた。

入念にふりまいた防水スプレーは全く意味をなさなかった。

腰の下からつま先までびしょ濡れだった。

「これすごいですよ！一度掛けたら一週間はもちますから！そーと一水はじきますよ！ほら見てください！靴にも服にも使えるんで！」

威勢のいい靴屋の定員の顔が頭に浮かんできた。  
若干の殺意を覚えたが、今はそれどころではない。

試験会場についたのは、12時すぎ。

試験開始まではまだ少し時間が残されていた。

最後の最後までテキストを開きとにかく粘った。

#### ◆宅建試験開始◆

13:00。いよいよ試験がスタートした。

「難しい。。。」

それが問題を解き始めた最初の印象だった。

自信はあった。

直前の過去問でも40点近く点数はとれていた。それも例年より難易度の高かった平成24年の過去問で。

それなのに難しい。。。

10問解いて、自信のある問題は3問ほどしかなかったらうか。

頭が真っ白になりそうだった。

それでも、問題を解き進めるうちに徐々に頭が回転し始めた。

難しかった最初のほうの問題も冷静に読めば、解ける問題も多かった。

試験時間最後の1秒まで問題と向き合った。

慎重に、冷静に、確実に。

そして、試験終わりの合図が鳴った。

「終わった。。。」

手ごたえはあった。

確実に合格できている。それほどの自信。

試験が終わると、雨は小雨になっていた。

僕は笑顔で家に帰った。

そして、この日初めての食事を口にした。

余談だが、僕は試験当日、試験が終わるまでご飯を食べない。

家を出る前に飲んだ栄養ドリンク、それがこの日の試験終了までに僕が喉を通った唯一の栄養だ。

僕が試験当日にご飯を食べない理由は単純だ。

緊張して喉を通らないこともあるが、それ以上に僕は小心者なのだ。

緊張するとよくお腹を壊す。

お腹の中にもものを入れると、腹痛に悩まされる可能性が高いのだ。

最悪の場合、試験を受けられなくなる。

栄養をとれないというデメリットはあったが、試験を受けられなくなるよりは  
ました。

しかし、もう試験は終わったのだ。

緊張からはすでに解放されていた。

この日の夕食は、いつもより格段においしかった。

#### ◆自己採点◆

だが1日は長い。この日のイベントはまだまだ残っていた。

そう、自己採点である。

自信はあるが、やはり採点はコワイ。

夜21:00。すでに各予備校をはじめ、宅建の講座をみついている教育機関から  
解答速報が出されていたことは、スマホですぐに調べられた。

恐る恐る採点を始めた。

「取りあえず5問。最初の5問だけ。。。」

信じられなかった。

お腹を殴られた気分だ。急に手が震えだした。

5問中たったの1問しか正解していなかったのである。

僕は思わず解答速報のページを閉じてしまった。

「きっと何かの間違いだ。そうに決まってる。これ、去年の解答ページでしょ。」

残念ながら、何度確認しても、どのサイトの解答速報を見ても最初の5問の解答番号に違いは無かった。

僕はそれ以上採点を進めることができなかった。

23 : 00。

取りあえず寝よう。明日おちついて、ゆっくり採点しよう。

布団に入った。

「眠れない。。。」

当たり前的事だ。

小心者の僕は気になって気になって仕方ない。

こんな精神状態のまま眠りにつけるはずが無かったのだ。

幸い、嫁と子どもはぐっすり眠っている。一人だけの時間だ。

ゆっくり深呼吸をして、心を落ち着かせた。

机に戻り、問題用紙を開き、再びスマホで解答速報のページを開いた。

もうあれこれ考えるのはやめた。

ただ単純に、機械的に、目の前の問題用紙の番号と解答番号を照らし合わせた。

余計な雑念が入る前に、一気に、素早く。

全ての問題の採点が終わった。

結果は 34 点。

「クソッ！！」

心の中で叫んだ。

問題用紙を握りしめ、床に叩きつけた。

合格とも、不合格ともとれない点数だったのである。

自信があっただけにとっても悔しかった。泣きたくなった。

「もし、もう少し早く宅建の勉強にとりかかっていたら。。。」

もし、あの帰省がなく勉強できる時間がもっとあったら。。。」

後悔の言葉ばかりが頭の中をめぐる。

もう遅いのだ。もう終わったことなのだ。

後悔先に立たずとはまさにこの事なのである。

しかし、少なくとも心の中のモヤモヤ感は解消された。

時間は夜中の 1 時。眠気がおそってきた。

「今日は 1 日つかれた。」

思いのほか、採点後はすぐに眠りにつくことができた。

◆疲れた…◆

宅建の試験が終わった次の日の朝。

悔しい気持ちは不思議と昨夜ほど強くはなく、冷静さを取り戻していた。

しかし決して気分は良くない。

お酒を飲んだわけでもないのに、二日酔いをしているような、そんな気分だった。

「疲れた。。。」

本当に疲れていた。

行政書士の試験まで残り3週間しかないにも関わらず、僕はこの日から丸々3日間、何もしなかった。

いや、何もできなかったと言ったほうが正しいかもしれない。

それほど宅建にエネルギーを奪われたのである。

不安を感じるエネルギーすらも残されていなかったのだ。

◆再スタート◆

2013年10月24日。

宅建試験が終わって、4日目の朝。

ようやく気力が戻ってきた。



少なくとも、行政書士の試験本番まで 17 日しか残されていないことに不安を覚えるくらいには。

9 月から今日のこの日まで、行政書士のための勉強は一切していない。

完全にブランクだった。

取りあえず、この日は 6 月以来となる実力試しの過去問に取り組んだ。

結果は思ったより芳しくなかった。

得点は 124 点。全体の 4 割ほどしか得点できていなかった。

状況は 6 月の終わりの時点から何も変わっていなかった。

唯一違ったのは宅建試験で問題を解き進めるのになれて、問題を解くのに大きなストレスを感じなくなっていたことくらいだろう。

## <<2013年 11月>>

### ◆残り2日◆

例によって嫁は気を利かせてくれて、子ども二人を連れて実家へ帰っていた。

集中できる環境は用意されていたが、今までにないほど気が張り詰めていた。

この時感じていた緊張・不安は宅建の時のそれとは比べ物にならなかった。

そもそも取り組んできた時間が違う。意気込みも違う。

半年以上も前から準備してきた。この時のために。

宅建のときには気にも留めていなかったことすら僕の集中をかき乱す。

換気扇の音、道路を走る車の音、なにもかもが雑音だった。

それくらい気が張り詰めていたのだ。

残り2日、この日から予想模試に取り組んだ。

問題が新しいこと以外は、過去問の取り組みと何ら変わりはない。

問題を解いて、採点して、テキストを読む。

工場のライン作業をこなすように、僕は試験当日がくるまでそれをただ単純に繰り返した。

### ◆再び試験本番◆

今回の試験会場は、徒歩と電車でおおよそ1時間30分。

試験の開始時間は宅建の時と同様 13 : 00 ちょうどである。

栄養ドリンクを 1 本だけ飲み干し、家を出た。

電車の中でも、もちろん勉強は怠らなかつた。

「少しでも多く、1 秒でも多く勉強しなければ」

宅建のときの悪夢を思い出す。

1 問の貴重さ。つい 3 週間前にそれを思い知ったばかりだ。

1 問でも多く、確実に点数を伸ばしたい。

そのことだけで頭がいっぱいだった。

試験会場の大学に到着すると、大手予備校のスタッフらしき人たちが必死にビラ配りをしていた。

「ああそうか。試験会場に入る人たちの 10 人に 9 人以上は不合格になるのか。生徒獲得には絶好の場所だ。」

そう思った瞬間、怒りが込み上げてきた。

「俺は合格するんだ！こんなビラは必要ない！」

ビラ配りをする人たちの集団の中を早足で過ぎ去り、僕は試験会場の教室へと足を踏み入れた。

時間は 12 : 30。

教室へはいると、すでに多くの受験生たちがテキストを広げ、最後の準備をしていた。

こういう知らない場所へくると、なぜか不思議と周りの人たちが自分よりもデキそうな人に見える。

こんな中で、自分が本当に上位数%の中に入れるのだろうか？

不安が押し寄せてきた。

緊張のあまり、息が荒くなる。動悸も止まらない。

まだ試験も始まっていないのに意識が飛びそうだった。

僕は深呼吸をし、なんとか意識を保った。

大丈夫。大丈夫。これまで頑張ってきたんだ。絶対大丈夫。

何度も心へそう言い聞かせた。

#### ◆行政書士試験開始◆

そうこうしているうちに、試験官が教室へはいつてきた。

試験の説明を一通りおえたあと、大きな鐘の音とともに試験がスタートした。

最初の問題は非常に易しい問題だった。

正答率 90%は超えるのではなかろうかというほどの基本的な問題。

正直助かった。そのおかげで一気に平常心を取り戻すことができた。

試験時間は 3 時間。

行政書士試験は、法令科目と一般知識の 2 つの科目に大別されている。

もちろん、より重要で配点も高いのが法令科目であるが、一般知識でも 14 問中 6 問以上正解しないと、その時点で不合格となってしまう。

いわゆる、「足切り」科目と呼ばれている。

僕自身、過去問では何度も足切りとなる点数に終わったことがある。

たとえ法令科目だけで合格ラインの 180 点を取っていたとしても、一般知識で足切りをくらうとマジで笑えない。

一通り問題を解き終えたのは 15 : 30。試験開始から 2 時間 30 分が経過したところだった。

残り時間は 30 分。

全ての問題をくまなく見直す時間はなかった。

とにかく、マークミスが無いかだけを確認し、残りの時間は一般知識の問題の見直しに集中した。それだけ 1 問の重みが違うからだ。

確信を持てた問題が 5 問。

2 択まで絞ることができた問題が 6 問。

全く分からなかった問題が 3 問。

多分大丈夫だろうとは思ったが、安心はできなかった。

現に、宅建試験では確信をもった問題がいくつも間違えていたからだ。

「カラン、カラン、カラン、カラン」鐘の音だ。

最後の 1 秒まで考え抜き、試験は終了した。

「終わった。。。」

試験の手ごたえはよくわからなかったけど、久々に型の力が抜けた。

こんなにリラックスできたのは何か月ぶりだったのだろうか？

しかし、そのリラックスも長くは続かなかった。

そう、自己採点である。

### ◆自己採点◆

家に帰り、例によってこの日始めての食事を食べた。

子どもを寝かしつけ、風呂からあがるとあっという間に時間は夜の 21:00。解答速報の時間である。

どうせ自己採点を終えないことには寝付けないのだろう。そんなことは分かっている。

解答速報のページを開いた。

間違いなく言えることは、試験本番よりも緊張していたことだ。

鼓動は高鳴り、冷汗は止まらなかった。

まずは最初の関門、一般知識の足切り問題だ。

それが一番怖かったと同時に、一番気になっていたところでもある。

一般知識の問題は 60 問中最後の 14 問である。

僕は後ろのほうから順番に採点を始めた。

順番に 6 問を採点したところで心臓が飛び出た。

なんと 6 問全問正解だったのだ。これは足切りをめでたく回避できたことも意味する。

僕はひとまずペンを置いて飛び上がった。

嬉しさのあまり、洗濯物を干している嫁の腰にタックルした。

「足切り回避した！足切り回避した！」

嫁の腰にしがみつき、何度も叫んだ。

嫁は無言で、そして危ない人を見るかのような怪訝な顔で僕を見つめた。

(たかが足切りを避けたくらいでなぜこんなにもはしゃいでいるんだこのバカは。。。)

今思い返せば、そんな顔だったのかもしれない。

しかし、その時の僕にそんなことは関係なかった。

今ならなんでもできる気がする！スーパーサイヤ人にでもなった気分だ！

もちろんそんなわけではないが、嫁の腰から自分の机へ戻るときに柱の角に足をぶつけたときに痛い思いをしたのは記憶に新しい。

とんだスーパーサイヤ人である。

痛みのせい、少しは人並みの正気が戻った。

まだ6問しか採点していない。

取りあえず、一般知識の残りの8問を採点した。

またもや心臓が飛び出した。

14問中13問が正解だったのだ。

予想外の上出来だった。

僕は飛び上がった。

嬉しさのあまり、洗濯物を干している嫁の腰にタックルした。

「一般知識 1 問しか間違っていなかった！一般知識 1 問しか間違っていなかった！」

何度も叫んだ。

嫁は相変わらず無言だった。

唯一違ったのは、顔を見上げると般若のような恐ろしい形相をしていたことだ。

僕は何事もなかったかのように机に戻り採点を続けた。

あのまま 1 秒でも長くあの場にいたら、間違いなく、、、死ぬ！

僕の中にかすかに残る、野生の本能がそう確信させた。

この日僕は生きていくうえで重要なことを一つ学んだ。

「この世で一番やってはいけないこと。それは、嫁の洗濯を邪魔することだ」

行政書士の勉強なんかよりもはるかに重要であることは言うまでもない。

間一髪、危機的状況から逃げ切った僕は残りの 46 問を一気に採点した。

○・・・○・・・×・・・○・・・×・・・○・・・

全ての採点が終わった。

両手を天上へつきあげた。



「受かった・・・」

静かに、しかしはっきりと一文字一文字を噛みしめるかのように、僕の口からこぼれ出てきた言葉だった。

結果待ちをするしかない記述式問題の配点を差し引いても、マークシート形式の問題だけで合格点が獲得できていた。

気がつくまで僕の横には嫁が座っていた。

さっきまでの表情がうそだったかのようにケロッとした顔をしていた。

「おめでとう。」

あたたかい声だった。

人は本当にうれしいと、はしゃぐことすら忘れてしまう。

僕はゆっくりとコブシを握りしめ、今、この瞬間を心に刻み込んだ。

## <<2013年 12月>>

### ◆12月4日◆

1通の封筒が届いた。

どうやら宅建の試験には合格したようである。

気になっていた合格ラインはこの年、33点だった。  
例年より、少しばかり難易度が高かったようである。

僕の点数は34点。ギリギリ合格という何ともカッコ悪い結果であったが、ひとまず心のモヤモヤ感は解消された。

あとは行政書士の合格通知を残すのみだが、不思議と不安はまったくくない。

マークミスがないことは入念に確認した。

とある大手予備校の採点システムによると、僕の点数は予備校生の猛者がうじゃうじゃいる中で上位2.5%に入るほどの高得点だった。

不安要素はなにもない。

文字通り、合格通知が僕の家ポストへ投函されるのを待つだけである。

頑張った甲斐があった。  
久々にそう思える経験だった。

言葉にできない快感が僕の全身をつつみこんだ。

そして僕はこれからも、学ぶことを決してやめることはない。

心臓が最後の鼓動を打ち終わるまで、学んで学んで学びつくす。

それが、他の誰でもない“僕が”選んだ道なのだから。

## おわりに

2013年12月23日。現在。

僕は成功哲学が大嫌いだ。

「強く信じれば夢はかなう？」

そんなはずがないではないか。

過去に成功哲学の勉強をしたことがある、その事実が今ではとっても恥ずかしい。

あんなに胡散臭く、妙にテンションが高く滑稽な学問は他にないだろう。

しかし、そんな僕が唯一成功哲学と考えを同じにするところがある。

それは、

「時間が無い」

という言い訳が大嫌いなことだ。

例えば今、何かの資格試験に挑戦したかったとする。

その場合、いつから勉強を始めるべきだろうか？

答えは簡単。

# 今

である。

今という時が、最も多くの勉強時間を確保できる最高のタイミングである。

1日ずらせば勉強できる時間が1日減る。

1週間ずらせば1週間減る。

後にも先にも、今この瞬間ほど何かを始めるのに適したタイミングは存在しない。

そしてもう一つ、「時間が無い」ということは「時間を無駄にしている」ということともほぼ同義であるということをおぼえてはならない。

人間はだれしもが、1日24時間の時間を与えられている。

自分のやりたいことへの挑戦のために“時間が無い”のならば、それは自分が時間を無駄にしている事を意味する。

仕事が忙しいという言い訳も、僕は聞き飽きた。

仕事が多い、残業が多い、飲み会が多い、誘いが多い、全部聞き飽きた。

新しいことに挑戦する時間が欲しいなら、古いものを捨てる覚悟が必要である。

人は万能ではないのだ。

守ろうとするものが増えれば増えるほど、いずれ許容値を超え、脆くなってくる。

新しいものばかり夢見て、古いものを捨てる覚悟が無ければ、それは文字通り“夢”に終わる。

しかし、古いものを捨てる覚悟をもつという“現実的な”手段を選択すること、そうすれば夢は現実となる可能性を秘めてくる。

凶らずも、僕があなたに伝えたいことと、成功哲学があなたに伝えたいことは同じである。

そしてそれは、たった一言の言葉で表すことができる。

**「さあ！今すぐ始めよう！！」**

—資格とっ太郎—